１ぼくは明日、昨日のきみとデートする（七月隆文）

―電車内で「さん」と知り合った美大生の「ぼく」が、翌日、動物園で友人の「林」とペンロッキーをしていると、……

キリンがこちらにお尻を向け、地面の草をむ。動きが止まった。チャンス。ぼくと林はペンを走らせる。―。描き始めてすぐ、緊張を覚えた。ここまで、すごく出来がいい。うまく描けている。けど当然ペンだから、やり直しがきかない。この先でミスしたら、すべておじゃんだ。でもキリンはいつまでも①同じポーズでいてくれない。ぼくは目に力を入れ、一気に線を引いた。

　―よし！　できた。いい感じにースがきいている。特にお尻のラインがうまく描けた。「いいね。」うしろから、聞こえた。普通なら、それなりに長い付き合いじゃないと背後からの声が誰かだなんてとっさにわからない。けど、②彼女のは、一瞬でわかった。振り向くと―福寿さんがまるでなんでもないように立っている。

一瞬頭がまっ白になったぼくをよそに、彼女は描きたてのクロッキーを見て、

「あっ、教室に張り出されるやつだ。」

「え？」

「ううんっ、お尻のラインがよく描けてるよねぇっ。」「そうなんだ、ここうまくいったんだ。」③ぼくは自分がいいと思っていたところをめられて、すっかりテンションが上がった。

④「首のパースもうまくきまって。」 「うんうん、いいねっ。」

ねっ、の言い方がたまらなくかわいらしい。小さい「っ」の中に「［　Ⅰ　］」が少し混じっていて、そのおどけた響きが嫌味じゃない。「福寿さん絵、描くの？」「ぜんぜん。手紙とかにちょっと描く程度だよ。」なんとなく上手そうだな、と思った。

林の視線を感じた。感じつつも、どうにもできないからあえてスルーし、彼女と話し続ける。「なんでここに？」「知り合いに聞いたの。あの学科の二回生なら、今はここに来てるだろうって。」言って、申し訳なさそうな表情をする。「ごめんね。連絡先、聞いておけばよかったのに。」「いや、ぜんぜん。」ほんとに、ぜんぜんだ。

「こんにちは。」彼女が林に話しかけた。「くんのお友達ですか？」とても自然な入り方だった。その空気感だけで、彼女の場に対する気遣いやコミュニケーション能力が伝わってくる。けど、「は、はい。」こいつのこんなに緊張しているところは初めて見た。いくら自然であっても、初対面のかわいい子に話しかけられれば緊張する。男のぼくにはその感覚がとてもよくわかった。

林はぎこちなくぼくを見て、「じゃあ俺、ライオン描きに行くから。」と、空気を読んだのと逃げるのを半々にしたニュアンスで去っていった。

＊語注

＊クロッキー…フランス語。英語の「スケッチ」に近い。速写。

＊パース…「パースペクティブ」の略。距離感の表現。遠近法。

問１　―線部①は、どんな「ポーズ」か。それが書かれている一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　　　　　　〕

問２　―線部②は、「彼女」の何か。文中から抜き出して答えよ。

〔　　　　〕

問３　―線部③は、どこを指すか。これ以前の文中から抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　〕

問４　――線部④は誰の発言か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　「ぼく」　　イ　林　　ウ　福寿さん

問５　［　］Ⅰに入るひらがな一字を答えよ。

〔　　　〕

問６　この小説は、「時間が逆に流れる世界に存在する『福寿さん』が、『ぼく』の住む世界に現れた」という設定の創作であるが、そのことがほのめかされている「福寿さん」の発言を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。（記号も一字と数える。）

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　キリンがこ

問２　声

問３　お尻のライン

問４　ア

問５　え

問６　「あっ、教

ポイント

問５　前に「ううんっ、お尻のラインがよく描けてるよねぇっ。」という発言がある。